

第60期（2009年4月期）日本語研修コース

鹿 島 央

今年度4月期の大使館推薦の研究留学生は25名で、文系部局15名、理系部局10名であった。全員、名古屋大学へ進学する研究留学生であった。文系部局では、国際開発研究科が10名とかなりの数にのぼった。

1. 研修生

A. 大使館推薦（研究留学生）

文部科学省より配置された大使館推薦の国費研究留学生は、19ヶ国25名(カンボジア4名、インド、マレーシア、モザンビーク各2名、エチオピア、カナダ、カメルーン、コンゴ、スペイン、タンザニア、チュニジア、トルコ、ハンガリー、パナマ、パプアニューギニア、ブラジル、ボリビア、マダガスカル、ラオス各1名)であった。このうち、アフリカからの留学生が8名とこれまでで最も多かった。今回、25名のうち8名が全学向けの日本語講座を受講した。内訳は、IJ112(全学集中日本語初級後半)4名、IJ211(全学集中日本語中級前半)2名、IJ212(全学集中日本語中級後半)1名、SJ300(全学日本語上級)1名であった。

B. 学内公募（大学推薦国費留学生）

今回は応募はなかった。

以上のように、第60期は研究留学生25名、うち17名が日本語研修コース、残り8名は全学向け日本語講座を受講した。

2. クラス編成

授業は、2クラス編成とし、専任教員2名、非常勤講師9名の計11名が担当した。

3. 時間割と日程

授業はこれまでのように月曜日から金曜日まで、午前8時45分から午後2時30分まで90分授業を3コマ

行った。

コースの日程は以下の通りである。

4月10日(金) 開講式、4月13日(月) 授業開始、夏季休業7月24日～8月28日、8月31日(月) 授業再開、9月8日(火) 修了式。

見学旅行は、予算配分方法が再検討中であったため申請できなかった。

4. カリキュラム

カリキュラムは、(1)主教材 *A Course in Modern Japanese [Revised Edition], Vols. 1 & 2* (名古屋大学日本語教育研究グループ編)を中心とする授業、(2)その他の活動(テーマを決めて話す:自分について、楽しかったこと、趣味、国の観光地、ホームビジット)(3)専門について話す、の3つで構成した。以下に、概要について報告する。

(a) 教科書を中心とする授業(1～14週)

昨年度と同様、夏休み前に主教材である *A Course in Modern Japanese, Vols. 1 & 2* が終了するようなカリキュラムとし、最終テスト、話すテストを行った。

・ Drill

・ Dialogue

・ Discourse Practice & Activity

会話の運用練習として各課の Discourse Practice にもとづくロールプレイなど口頭練習を行った。対面での許可をもらう練習、指導教員と会う約束を電話で行う練習、ホームビジットの家族との電話連絡など。

・ Aural Comprehension

・ Reading Comprehension

・ WebCMJ (10課まで授業として)

・ 漢字および漢字セミナー

300字の導入と練習、L15での電子黒板を用いた漢字練習

(b) その他の活動

・話す練習

これまでと同じテーマ（「楽しかったこと」「趣味について」「国の観光地」「国との違いについて」）についてワープロで原稿を書き、話す活動として口頭発表を行った。日本人ゲスト（各回2名）にインタビューする活動も例年通り2度行った。

・書く練習

ひらがな練習のための“Hiragana Textbook”の使用話す練習での原稿作成をワープロを用いて行なった。

・Pronunciation Practice

コースの最初に発音システムを6回（45分×6回）導入・練習を行った。

会話の時間に「Sound Practice」という発音練習用シートを使用し5分程度の発音練習を行った。主に、アクセントとリズムの知覚と生成である。

・ホームビジットプログラム

ホームビジットプログラムは、7月第2週目の土日に実施した。

実際に日本人の生活が多少でも分かること、日本語での体験ができることで好評なプログラムである。今回は、道に迷った学生もいたようで、バックアップ体制についてさらに綿密に考えておく必要性を感じた。

(c) 「専門について話す」(第15週)

このプログラムでは1名につき8時間超の指導の後、各留学生それぞれが持ち時間8分で専門領域について発表することになっている。発表は207講義室で行った。ほとんどの学生がパワーポイントを使用した。

5. まとめと問題点

今期は積極的に日本語を使おうとする学生が多く、私生活でも日本人との交流を深めていたようである。文化的に大きな違いがあるにも拘わらず、柔軟に受け入れていく様子は、本人の努力も相当であろうが、周りから見ても気持ちのいいものである。言語習得は単に言葉だけの習得ではないことを実感した。今期は、自転車でころんでかなりの重傷を負った学生や、指導教員との言語上での行き違い、ご家族の問題など、いくつかの事例があったが、学生相互の助け合いもあり、大人としての対応のできる学生であった。前期には、9月の入学試験のために日本語学習に集中できない学生がいるのが通例であるが、今期はそのような目立った休み方をするものはいなかった。また、ゼミなどでの欠席もほとんどなかった。